

英語を活かした特色ある日本語教員養成を推進するための基礎的研究：国際英語学科日本語教員養成コースの充実を目指して

学芸学部 国際英語学科 小森 道彦
学芸学部 国際英語学科 有田 節子

研究の目的

本学では、平成22年度に英米文学科が国際英語学科に改組され、新たに日本語教員養成コースが設置された。日本語教員養成自体はすでに1994年から日本語教育課程として日本語研究センターで運営されているが、その科目の多くが国文学科の日本語学系科目として開かれていた。今回の改組で、日本語教員養成に関わる科目の多くが国際英語学科の語学系専門科目として開設されることになる。今後、英語系学科の学生が英語力を活かして国際社会に貢献するという将来像と結びついた形で、新しい日本語教員養成を推進することが求められている。この研究では、英語系学科における日本語教員養成がどうあるべきかを検討するとともに、国際都市大阪に近接し、また、国際的に注目される中小企業が密集する東大阪に位置するという本学の立地を活かした地域密着型国際交流活動としての日本語教員養成の可能性を探ることである。

研究の学術的背景

日本の高等教育機関における日本語教員養成は、英語を含む外国語系の学部・大学院において始まった。学部レベルでは、国際基督教大学(ICU)が代表的でありその歴史は古い。大学院レベルでは、旧大阪外国語大学大学院、東京外国語大学大学院、筑波大学大学院における日本語研究を主体とした日本語教育専門家の育成が広く知られている。本学のような国文学(日本文学)の学科が主体となる日本語教員養成は、1990年代半ばからあちこちの大学に設置され、その多くは、国語学(日本語学)の従来の科目に日本語教育系の科目を追加したという程度のもので、本格的に日本語教師を養成するというものではなかった。その原因はいくつか考えられるが、その一つとして、日本語教育の対象となるのは、当然ながら、日本語の非母語話者であり、日本語教師は日本語以外の言語が操れることが要求されるにも関わらず、国文学科に所属する学生の大半は外国語に苦手意識を持っているということが挙げられる。外国語系の学部・大学院における日本語学系科目には、「日本語を外国語として見る」姿勢が貫かれているが、外国語が苦手な学生が大半である国文

学科の日本語学系科目では、そのような姿勢を貫くのは困難である。本学もその例外ではなく、日本語教育課程の科目の多くが日本語教員養成に必ずしも結びつかないという実状があった。一方、外国語系学部においても問題はあつた。英語などの外国語を専門とする学生に対し、その専門科目とは別に、日本語学の専門的・体系的知識を身につけさせることはそれほど簡単なことではない。このように国文学系学科が主体となる場合にも、外国語系学部が主体となる場合にもそれぞれ解決すべき問題がある。改組により、日本語教員養成課程の主体が国文学系学科から外国語学系学科に移行されるのを機に、両者の長所を取り入れた改編の可能性をさぐる必要がある。

研究成果について

平成21年度の研究活動において、以下のような成果を得た。

- ①英語を専門とする学生を対象とした日本語学系科目の内容についての検討について、アメリカの日本語教育で用いられているテキスト及びカリキュラムの詳細な分析を行った。
- ②外国語系学科を主体とした日本語教員養成の実態を把握するために、長崎純心大学等と情報交換を行った。
- ③日本語教育と英語教育の融合について、日本語教育で導入されているCEFR(Common European Framework of Reference for Languages)を、先駆的取り組みとして国際英語学科英語プログラム(English Language Passport Program)に導入した。(なお、参加予定であったCEFRに関する研究会「英独仏合同シンポジウム&研究会(早稲田大学)」は東北大震災のため中止となった。また、平成23年12月には国際英語学科等主催でCEFRに関する公開講演会及びシンポジウムが行われた。)
- ④地域の小、中学校および日本語教室との連携に関しては、本学卒業生で地域の日本語教室にボランティアとして従事している樋口尊子氏と、東大阪市の高校で外国人生徒に日本語指導を行なっている荒木聖加氏から日本語サポートに関する有意義な情報を得た。